

パルシステム東京 震災復興支援基金「パル未来花基金」助成活動レポート

震災復興支援基金「パル未来花基金」の助成を受けて、復興支援活動に取り組みました。その取り組みについて、組合員の皆さんにご報告します。

グループ名	教育・芸術・医療でつなぐ会
支援対象者・エリア	宮城県を中心に東北各県
企画開催地	仙台市
企画名称	みんなで春を迎えるワークショップ～響きとつながりの中で～
実施期間	2019年2月16日、17日

支援活動の目的・内容・感想

(どうしてこの活動をはじめたのか、どのようなことに取り組んだのか、取り組んだ感想など)

震災で甚大な被害を受けた多賀城市で、私たちは震災後7週目にワークショップを行い、2015年10月にはパル未来花基金を受け、多賀城市的同じ会場でワークショップを行うことができた。いずれも参加者からは生き生きとした気持ちを取り戻したと言われた。しかし、震災から7年経った2018年に、震災の日が近づいてくると未だに緊張と不安を感じるとの訴えを被災地の方々から聞いた。震災の日を迎える前に、気持ちを和らげ、不安から解放される働きかけが必要と判断し、2018年2月に急遽行ったワークショップで、強く感じていた不安や緊張から解放され、無事3月11日を迎えたとの声を聞いた。3.11直前の不安と緊張から解放されるよう、シュタイナー教育の手法によるワークショップを継続し、働きかけることを目的として企画した。

8年目を迎える目前のワークショップでは、大人達の緊張した面持ちから以前よりは改善したものやはり不安があるということが見て取れた。声のワークショップが始まり、声を出して歌いつつ、自分の声で身体の緊張を解き、リラックスした状態を体感してもらった。二人組のペアで肩、背中、腰、腕、脚をマッサージしながら歌うエクササイズでは人の手の温もりが伝わるので安心感・安堵感が得られる。その後、わらべ歌、テゼ修道院の短い曲を使いカノンで歌い、他者と響きを合わせて周囲の声にも耳を傾けハーモニーの豊かさを味わい、曲を創造するなかで各自が個としてしっかりと存在しつつ他者と深く温かくつながる体験となった。

8年目を目前にしたバイオグラフィーワークでは、参加者の緊張した面持ちと共に、各自が被災した日からゆっくりと歩みつつ自分の人生に向き合おうとしている姿勢が言葉の端々にうかがえた。子ども時代のワークでは小さいときに何をして遊んでいたか思い出してもらい、その場面を自分の姿を絵の中に入れてクレヨンで絵を描いた。この絵の出来事をシェアしたところ、誰にも同じような幼い時代があったこと、他者の体験に耳を傾ける時間に思い出が蘇ってきたこと、これまでに楽しいことがたくさんあったことを思い出し、孤独ではないと気づいたなど、震災当時の不安を凌ぐ明るい気づきがもたらされた。さらに自分の人生の課題を探っていきたいとより積極的な笑顔が見られた。

子ども達とは、幼児達の遊びのスペース、小学生の活動のスペースに分けた。幼児は自由に遊びが展開できるよう自然の素材を用いたおもちゃ、手作りの積み木や柔らかい布などを準備した。小学生とは椅子やつくえのトンネルをくぐったり、みんなで布の端を持って布を上下させ、布上でメルヘンクーゲル（転がると音が出る）を布から落ちないように互いを感じながら動かした。その後、トランスペアント紙を用いて、窓飾りを作成した。単純な作業ながらできあがった飾りをとても喜んでいた。

活動の様子（写真など）

